

## II 研究主題への取り組み

本校では教育目標を、「楽しい学校生活の中で、その力を精一杯伸ばし、働くことに喜びを持ち、社会の一員として生きる人間を育成する」と設定している。つまり、最終的には「社会的自立」をめざし、障害の程度に応じて、それぞれの仕方です立することがそのねらいである。このことは、本校創設当時から一貫してめざしている目標であり、それに向かって努力を積み重ねてきた。

しかし、児童生徒の思いや気持ち、一人ひとりが時間をかけねばり強く目標に立ち向かっていく主体的な姿、その目標に到達したときの喜びに満ちた笑顔の大切さといった、「社会的自立」への過程における子どもたちの情意的な面へのアプローチを、軽視していたのではないかという声があがってきた。

また、障害児を取り巻く社会情勢をみると、「Quality Of Life（生活の質の向上）」という一人ひとりが自分なりに、いかに質の高い豊かな生活を実現し楽しむかという考え方がクローズアップされてきている。さらに、学習指導要領でも、「個性を生かす教育の充実に努める」ことが強調されている。

こうした背景を受けて、われわれも、子どもたちの「社会的自立」に向けたよりよい姿を求めて研究を実践していきたいと考えた。

### 1 研究主題設定の趣旨

本校の教育目標を上記のように、「楽しい学校生活の中で」としているが、この「楽しい・楽しむ」という面から児童生徒の実態を見ると、以下のようなことがわかる。

教師が意図的に設定した学習場面では、児童生徒は活動を楽しみ、生活に必要な力を少しずつ身につけている。しかし、学習場面を離れ、自ら行動を決定する場面になると、何をして過ごしていいのかわからなかったり、したいことが見つからなかったりして、無目的に過ごしていることが多い。楽しんでいる場合でもパターン化して拡がりががないなど、自らが生活の主体者となって楽しく豊かに過ごしているとは言えない。

生活年齢の高い生徒でも、自分で選択したり、決定したりする経験が乏しく、自分なりの考えを持つことが苦手である。また、指示待ちの傾向があり、自分なりの目標を持って、それに向かって努力している生徒が少ない。

このような実態から、人に言われたり、課題や場を設定されたりしたなかで、楽しんでいる活動がほとんどであることが明らかにされてきた。

活動を楽しみ、自ら目標を持ったり、自分なりの考え方ややり方で、粘り強く課題に立ち向かっていく。その課題をクリアしたとき、満足感や成就感を持つ。そのやり抜いた喜びが次の活動のエネルギーとなり、次の課題に立ち向かっていく。われわれは、このよう

な姿を本校の児童生徒に求めていきたいと考えた。主体的に自らの生活を切り開いていくことができるこの姿こそ、われわれが求める子どもたちの姿であり、現在から将来にわたって「生活を楽しむ子」とであると考えた。そこで、研究主題を「生活を楽しむ子」とし、研究を進めていくことにした。具体的な姿は、

- ① 自主的に、自ら求めていく
- ② パターン化したものではなく、いろいろなものに挑戦し、楽しみを拡げていく
- ③ ひとりだけの楽しみではなく、仲間とも楽しむ
- ④ 自己の楽しい活動に対して、達成感や成就感を持つ
- ⑤ 楽しんだ活動が、次の楽しい活動の力となる

という姿であり、このような学校生活を過ごすことによって、将来、社会に出てからの生活の中でも、われわれがめざす将来像

- ・健康で
- ・生活のリズムが整っていて
- ・働く場を持つことで社会参加をし、自分の持つ力を出し切り
- ・人と関わりがあり
- ・自分なりにしたいこと楽しみやいきがいがあり、余暇を有意義に利用できる

に近づいていけるものと考えた。

## 2. 研究の構想

本校は、将来児童生徒が、「社会的自立」をすることをめざしているが、われわれがめざす「社会的自立」とは、「生活する力」と「生活を楽しむ力」を合わせ持った姿であると考えます。

この研究では、「生活を楽しむ子」を育てていくことをめざして研究を進めていく。「生活を楽しむ子」というのは、好きなものや自分が使う道具、さらには生き方などさまざまなものを自分で選んだり、段取りや筋道・周囲の状況を判断したりしながら、目標を持つ

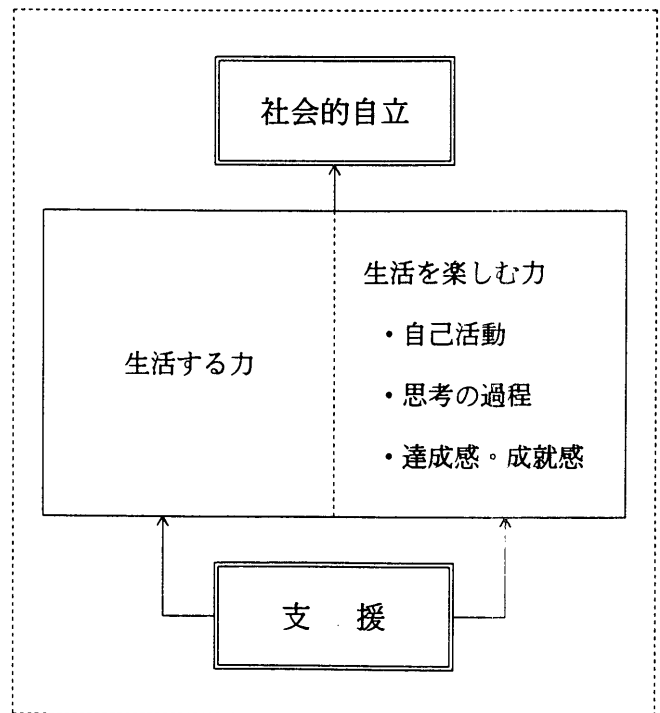


図-1 研究主題と社会的自立の考え方を表す図

て主体的に自己活動し、できたことに達成感や成就感を持つ子である。発達の段階や生活の年齢などによってそのやり方は異なるが、選んだり判断したり考えたりする「思考の過程」を重視していきたいと考えている（図1参照）。

そこで、「生活を楽しむ子」を「自己活動」、「思考の過程」、「達成感・成就感」という側面で見えていこうとした。

研究の場として、各学部の教育課程における授業の場を考え、授業づくりを中心に組み組んでいこうとした。実践の最小単位であり、中核をなすものは授業であり、充実した授業を積み上げていくことで、われわれがめざす「生活を楽しむ子」を育てていくことができる。この授業づくりの中では、「自己活動」、「思考の過程」、「達成感・成就感」が実現されるような題材を選定し、教師の支援を工夫していく。そこで、授業づくりをしていく際のアプローチの方向として副題を「題材の選定と支援の工夫」とし、その側面から研究に切り込んでいくことにした。

研究・実践は、生活年齢を大切にしていけるように各学部を中心に進めた。そして、下表のような各学部の目標を決めた。

小学部	「興味を持ちながらいきいきと活動する子」
中学部	「自分なりのめあてを持って、自らの活動を楽しむ子」
高等部	「自分の考えを持ち、活動のなかに喜びをみいだす生徒」

研究部会や全体研究会を通して、各学部の実践の内容を共通理解し、小学部、中学部、高等部の一貫性を図っていこうとしている。

ここで本研究推進にあたって使用した用語について、説明を加えておきたい。

#### 自己活動と思考の過程の重視

本校の教育課程の中で、生活単元学習や作業学習の占める比重は大きい。その生活・作業教育論に関して、荒川智氏は、「新教育運動における『生活』『作業』と障害児教育」のなかで、生活・作業教育論の基本的性格として、「第1に、子どもの自己活動を基本にしていることである。子どもを受動的な存在としてみなし、不毛な知識を注入していくのではなく、生活実践の中で子どもが興味・関心を持ち、必要に感じたことを学習内容として組織していく。…略…第2に、子ども自身の思考の過程を重視していることである。…思考の過程を重視していけば、学習の系統性と分化を必然的に求めていくこととなる。もちろんそれは実生活と切り離されたものではない」(『障害児問題研究』 第21巻第3号 P220)と述べているが、この考え方を取り入れていった。

#### 達成感・成就感

児童生徒が、自分たちのまわりにある事象に興味・関心を持ち、「やってみたい、やりたい」と挑戦し、自ら目標を決めて取り組み、成功したり自分の目標が達成したとき、大きな喜びを持つ。その達成感や成就感が、自信となり、次の活動を引き起こすエネルギーになっていく。授業づくりの中でも、次の活動に発展させていくような意欲や達成感・成就感を大切にしていきたい。

#### 支援

広義には、支援を、子どもの自主性を大切に、子どもに寄り添い教師の立場で見守りながら、必要な手助けをするものであると考えた。つまり、その子なりの生き方・考え方・やり方を大切に、学校生活や、将来的には社会の中にその子のよさが生き、そのままの姿でその子として生きていけるように、応援していくことである。

一方、狭義には、授業づくりの中の、教師の児童生徒に対する姿勢や学習活動の具体的な援助・手だてをいう。

この研究の「自己活動」や「思考の過程の重視」については、今までの研究の成果である「自分づくり」の考え方を継承しながら、研究していきたい。

### 自分づくり

平成4～6年度の「発達と障害に応じた教育をめざして —— コミュニケーションに視点をあてて ——」の研究のなかで、児童生徒の内面を把握しようとして「自分づくり」の段階を考えてきた。その段階とは、1歳半の「自我の誕生」から、「自制心の芽生え・形成」、9歳の「自己客観視」の段階である。(詳しくは、本校紀要15集P.10参照)。

「自分づくり」についてのこうした考え方は、この「生活を楽しむ子」の研究でも①児童生徒の実態把握のため ②児童生徒の思考の過程の裏付けとするため ③目標の設定のため ④指導の手だてを考慮するためなどに利用していきたい。

## 3. 取り組み

### (1) 取り組みの経過

平成7年度(1年次)は、全体及び学部での研究会議で、研究主題を模索し、その理論づくりや研究方法等のおおよその骨子を作り上げてきた。その一方で、各学部が1回ずつ研究授業と授業研究会を持ち、「生活を楽しむ子」をめざした授業づくりをした。

小学部は生活単元学習「クリスマス会」で「だしものをみてもらおう」、中学部は生活単元学習「学習発表会」で「みんなでたいこのリズムをつくろう Part.1」、高等部は生活一般で「卒業後の生活」の授業に取り組み、「生活を楽しむ子」の考え方やそのための教師の支援、よりミクロな視点での授業研究の必要性について考えていった。そこで、修正・再検討しながら、さらによりよい授業をめざして積み上げてきた。また、7月には、指導助言の先生を招いて、研究テーマの模索、「生活教育」についての研修会を行い、1月には、愛知県立大学の田中良三教授を招いて「人間として豊かに生きる —— 障害児の発達と自立——」というテーマで、研修会を行った。

平成8年度(2年次)には、前年度作り上げた理論や研究方法に沿って、各学部で実践をしながら、小学部、中学部、高等部の関連を図っていった。また、昨年度に引き続き、本年度も各学部で授業を公開し、研究を深めていった。小学部は、生活単元学習「いもほり宿泊」、中学部は生活単元学習「お楽しみ会」、高等部は生活一般「ボウリング

に行こう」の授業づくりに取り組んだ。そのなかで、題材の選定や支援の仕方さらに自分づくりについての話し合いがなされた。

### (2) 各学部の取り組み

研究実践は、各学部単位で取り組んでいった。その取り組みの概観を表にした（詳細は各学部の実践を参照のこと）。

	小学部	中学部	高等部
テーマ	興味を持ちながら いきいきと活動する子	自分なりの めあてを持って、 自らの活動を楽しむ子	自分の考えを持ち、 活動のなかに 喜びをみいだす生徒
研究教科・領域	生活単元学習	生活単元学習 その他の学習 外部的な行事への参加	生活一般・選択学習 特別活動（学部集会、 ホームルーム）・職業
基本的な考え方	<ul style="list-style-type: none"> <li>一人ひとりの個性や考え方にできるだけ寄り添い今を充実して生きることを大切にする。</li> <li>楽しみを育て、教えていく。楽しみをみんなの中で育てていく。</li> <li>自己活動や思考の過程を高めるような、支援の仕方を工夫していく。</li> <li>成功感、成就感のある活動を積み重ね、自信につなげる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の思考が発展的につながるような題材を選定する。</li> <li>目的意識を持ち、それが自覚に結びつくよう目的を明確にして提示する。</li> <li>自分の思いを、できるだけ言葉で表現させる。</li> <li>少し高い目標を持ち、失敗が次の意欲や成功につながるような支援の仕方を工夫する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一人ひとりの個性をより大切にし、内面にも目を向ける取り組みをしていく。</li> <li>思考の揺れを大切にしながら、生徒が自分の考えを持つことを重視する。</li> <li>主体的に活動に取り組むための支援を工夫し積極性や自信につなげる。</li> </ul>

### (3) 学部間の連関

各学部の実践を基にしなが、12年間一貫教育をめざして各学部の連関に努めた。それぞれの学部の特徴をとらえながら、発達年齢も考慮に入れた指導の在り方を研究し、学校として一貫した姿勢でこの研究主題に取り組んでいきたいと考え、次頁の表にまとめた。

	小学部	中学部	高等部
各学部の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「生活を楽しむ」ための素地づくりをする。</li> <li>・みたてつもり活動やごっこ遊びのなかでやってみる。</li> <li>・みんなで楽しむ経験をし、楽しめるものの種類を増やしていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実生活に近いものを経験していく。</li> <li>・自分の持っている力を試し、使ってみる。</li> <li>・自分が楽しめるものを増やしたり、それを使ってさらに楽しんだりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会参加を意識して、実生活に生きるような内容ややり方を身につけていく。</li> <li>・自分が楽しめるものを増やし、人との関わりのなかで楽しめるようにする。</li> </ul>
自分づくりの段階			
自己活動と思考の過程	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の興味・関心で自己活動する。</li> <li>・ごく簡単な選択をする。</li> <li>・興味あることを継続してする。</li> <li>・やりたいことができるかどうかの葛藤。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・周りの人を意識して思考する。</li> <li>・新しいことに挑戦する。</li> <li>・失敗を恐れず、何にでも挑戦する意欲を持つ。</li> <li>・自己決定し、決定したことに責任を持つ。</li> <li>・まわりの人に言われての葛藤。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人の意見を取り入れながら自分の考えを持つ。</li> <li>・自己認識に基づいた思考をしていく。</li> <li>・自己決定したことに、見通しをもって取り組む。</li> <li>・社会的価値観と自分の価値観との葛藤。</li> </ul>
題材の選定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・繰り返しの学習。</li> <li>・行事単位では、6年間の繰り返して見通しを持つ・自信をつける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パターンを崩したり発展させたりして、新しい世界を拡げていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・拡がり</li> <li>・応用力</li> </ul>
支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・できるように補助し、成功体験を持つことができるようにする。</li> <li>・個に応じてつまづきを考慮して設定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・援助を控え、困難を自分の力で乗り越えることができるようにする。</li> <li>・失敗を成功につなげるよう支援する。・見守る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・青年期にある生徒たちの人格を尊重し、寄り添う姿勢を大切にしながら、支援していく。</li> </ul>
達成感・成就感	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生や友だちとできたことを共感し合う。</li> <li>・乗り越えられる抵抗を越え、成功体験を持つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が決めたという自覚を持ち、粘り強く取り組んで、自分の力でやり遂げたという成就感を持つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目的意識を持ちながら最後までやり遂げ、できばえを自分なりに評価して、成就感を持つ。</li> </ul>

実践を通して、さらに検討し、より適切なものにしていきたい。

(倉)